

三本の弦で広がる世界、その音色で自分を表現したい――

全国レベルの表現力に引き込まれていきます。

間ができ、演奏の緊張よりも楽しさが多くなって、自分の弾く音色が変わっていきま

分の心を伝えたい」と思い始めました。

【音に魅せられて】
稲崎さんと三味線の出会いは、祖母が自宅で開いていた三味線教室。幼少の頃から楽器とその音色にふれていた稲崎さんは、小学1年生になると、日本の弦楽器の基礎となる曲「六段」を口ずさむほどになつていきました。これを聴いた祖母は、全ての音程が完璧だったのでびっくりしたそうです。小学2年生から、雅會・中野貴康師匠の師事を受けるようにになると

【人を思い伝えたい】
小学5年生で出場した初の全国大会では、入賞を逃すも、それを弾みに一層努

間ができ、演奏の緊張よりも楽しさが多くなって、自分の弾く音色が変わっていきました」と話す稲崎さんは、その後の「津軽三味線全国大会」で、7回の全国制覇の栄冠に輝いています。



若き津軽三味線奏者
稲崎晴也さん（南原）

【響く命の音】
「一番うれしかったのは、滋賀県で行われた全国大会で数百人の出場者の中から選ばれたファン投票の部1位に輝いたこと。まさに『打つは自分、響くは命』を体感した瞬間でした」と話す稲崎さん。「命を込めた音は、感動を与えるはず」と信じ、一生懸命に演奏し続けています。

【響く命の音】
今年、中学3年生になった稲崎さんは、プロ奏者や指導者なども出場した「津軽三味線世界大会」で、最年少ながら入賞。舞台を振り返り「今まで一番の演奏ができて、自信になりました。今は、世界大会で優勝して、プロになることが夢です。東京オリンピックなどで三味線を弾くメンバーになって、世界中の人を日本文化でおもてなしたいです」と話してくれました。

【響く命の音】
感謝の気持ちと向上心を忘れずに、切磋琢磨している稲崎さん。目線の先には、世界で通用する自らのバチさばきが見えているようです。

地元小学校での公開授業や祭り、成人式や全国各地のイベントなどでも演奏するようになった稲崎さんは「涙を流して聴いてくれたり、笑顔で応援してくれたりする人たちに、もっと三味線の音色や自



第30回初倉まつりで演奏する稲崎さん

